

世界自然遺産知床における地域協働による道路維持管理のあり方に関する一考察

(株) ドーコン 交通事業本部 交通部 正会員 ○及川 宏之
 (株) ドーコン 交通事業本部 交通部 正会員 金田 武
 (株) ドーコン 交通事業本部 交通部 渡辺 弥生

1. はじめに

2005年7月世界自然遺産に登録された知床は、優れた景観資源を有する地域であり、知床に通じる一般国道334号は、「知床連山」、「海に沈む夕日」をはじめ、オホーツク海沿岸特有の「流氷」など、走りながら魅力ある景観を堪能できる絶好のアクセスルートである。しかしながら、冬期には、除雪によって堆雪した雪堤が原因で、走行する乗用車から「流氷」や「海」が楽しめないという弱点を抱えていた。

本稿では、冬期の流氷景観確保のために、地域協働で実施した道路維持管理手法を紹介するとともに、今後のあり方に関して考察する。

図-1.
雪堤があるため
見えない流氷や海



図-2.
雪堤がなければ
見える流氷や海

2. 知床の冬の景観の現状

知床の冬の魅力は「流氷」である。「流氷」は地域住民にとっても生活の大きな楽しみであり、知床に来訪する観光客の大半も「流氷」を見たいと思っている。しかし、雪堤高さが50cm程度になると乗用車からの流氷景観が阻害される。道路管理者が附帯除雪を実施しない場合はもちろん、附帯除雪を実施した後も、継続的に除雪を実施しなければ雪堤高さが50cm以上となり、流氷景観が確保できない状況にあった。(表-1)

このため、地域・ユーザーから「我々も見たいし、観光客に見せたいのに、知床へのアクセス道路で流氷が見えないのは魅力減では？」と指摘されていた。

表-1. 主要地点の雪堤の状況

地点	当初	附帯除雪実施後に 何もしない場合	
	最大雪堤 高さ(cm)	最大雪堤 高さ(cm)	差 (cm)
遠音別	70	50	20
オシンコシンの滝	70	50	20
三段の滝	100	75	25
季風クラブ前	120	120	0
ブユニ岬	90	90	0

3. 流氷景観確保の取組み

この弱点の指摘は、一般国道334号斜里～ウトロ間を対象とし地域・ユーザーと道路管理者が協働で「知床らしい道路」を検討する勉強会の場に出た意見である。この指摘に対し「景観が見えるように配慮した道路の維持管理」について知恵を出し合った。

道路管理者からは「転落防止柵の堆雪を取り除く『附帯除雪』は、除雪のたびに実施するのは体制的に困難であり、また、年に複数回に渡って実施するのはコスト的に困難である。しかし、ひと冬1回程度の実施なら可能である」という意見、地域からは「景観が魅力的で特に雪堤を除去すべき箇所や期間」の提案があり、また、「住民だけでは作業に限界があるものの、実際に可能かやってみよう」という前向きな意見が出た。

これらの意見を踏まえ、すぐに実現可能な取り組みとして、道路管理者が「附帯除雪」により堅く固まった雪堤を一度除去し、その後、地域住民団体が「雪堤高さを監視」し、自らが作成したチラシで参加者を募り、「雪かき」を実施する「雪かきボランティア」の案をまとめ、実施に至った。

キーワード：地域協働，住民参加，維持管理，除雪，景観

連絡先：〒004-8585 北海道札幌市厚別区厚別中央1条5丁目4-1 TEL011-801-1520

4. 「雪かきボランティア」の実施結果

「雪かきボランティア」は流水景観を堪能できる5箇所を選定し、計2回に渡り、各回ともに約30人が集まって実施した。(表-2, 図-3, 図-4)

実施した結果、雪堤の高さがゼロとなり、当日に來訪していた観光客の大半が、走行中に流水を見ることができた。(図-5)

参加者のうち「今後も参加したい」、「都合が合えば参加したい」と答えた方が約9割を占め、参加者ならびに観光客から取組みに対する高い評価を得られた。(図-6, 図-7)

なお、1回目は天候が悪く「作業が大変だった」という方が約半数であったが、2回目は天候も良く、堆雪していた雪の量も少なく、さらに、家庭用除雪機が3台も持ち込まれるなど作業の効率性が高まったことで「作業が大変だった」という意見は1割程度に減少した。(図-8)

表-2. 「雪かきボランティア」の実施概要

	1回目	2回目
実施日	平成20年2月28日	平成20年3月11日
天候	風雪が強く、地吹雪に近い状況	風もさほど強くない、良い天候。
参加者	28名	30名
体制	2パーティに分かれ、分担して実施	1パーティで、1箇所ずつ除雪を実施
作業時間	2時間30分程度	1時間30分程度

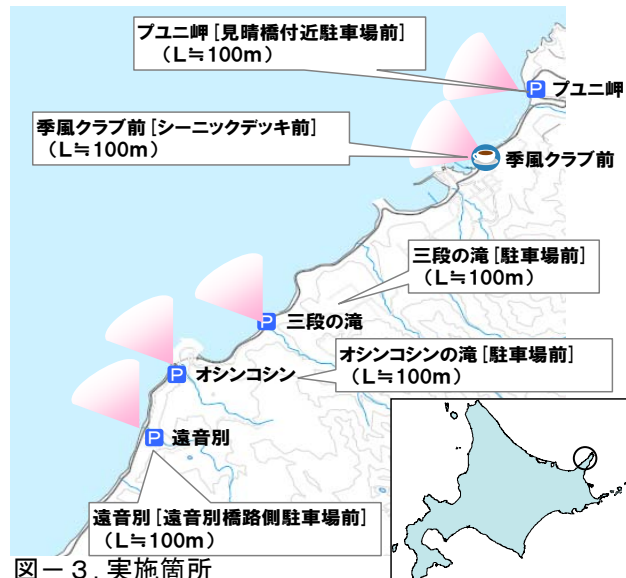


図-3. 実施箇所



図-4. 雪かきボランティアの様子

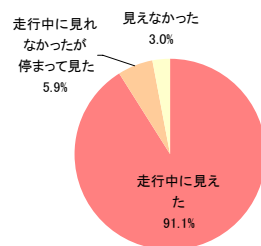


図-5. 流水景観の確保状況

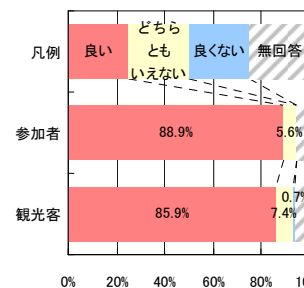


図-7. 「雪かきボランティア」の評価

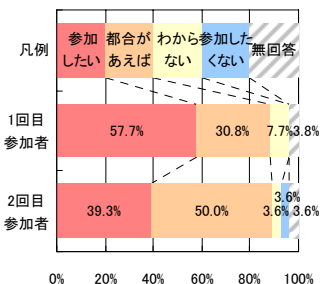


図-8. 今後の参加の意向

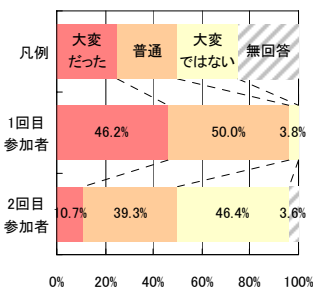


図-9. 今後の道路維持管理のあり方

5. 今後の道路維持管理のあり方

景観が魅力的な箇所を事前に選定し、その箇所においてピンポイントで附帯除雪を実施し、人力でも除雪可能な状態であれば、ボランティアでも除雪は十分可能であった。特に降雪が増え始める2月中旬から雪堤高さを監視し、実施のタイミングを見計らうことで、労力が軽減される。このことから箇所選定、雪堤監視、附帯除雪実施の時期決定から実施までの一連の過程を地域協働で行うことにより、道路管理者の維持管理の負担が減り、かつ、地域住民や観光客などユーザーの満足度向上に繋がる。

また、地域住民が自ら作成したチラシで参加者を募ることで、地域からの参加者が確保でき、「雪かきボランティア」の取組みの周知が図られた。このことから参加者募集においては、地域からの発信が重要であると推察される。

なお、「普段、雪に触れたことのない観光客にも参加を募る」というアイディアもあったが、受入れ体制などで実現に至らなかった。観光客の参加は、地域間交流の促進、知床の魅力を体感していただける可能性を秘めていることから、このことについては、今後の検討課題である。

最後に、本稿作成の基礎となるデータ取得にご協力いただいたしれとこ・ウトロフォーラム21事務局桜井様、北海道開発局網走開発建設部に感謝の意を表します。